

エンターテイメントの極致をつくってみたい

東郷町出身 映画監督 加藤卓哉さん (42歳)

4月に公開された映画『裏アカ』で映画監督デビューをした加藤卓哉さん。高校時代まで東郷町で過ごしました。

今回は、加藤さんに映画監督になるまでの道のりや、映画の制作で大切にしていることなどについてお話を伺いました。



人を楽しませることが好き

「小学生の頃から人を楽しませることが好き」と話す加藤さん。給食の時間に出し物をしたり、高校では友人と映画の画コンテを作って遊んでいたと振り返ります。

その後、映像に携わる仕事したいとの想いから、映画の制作も行っているSONYに就職します。ゲームの開発部門で5年間働きましたが、転職を決意。

映画会社を何社か受けた中で、映画と異なるSONYでの経験を買われ、東映と契約。『剣岳 点の記』『あなたへ』『くちびるに歌を』など、さまざまな監督のもと、多岐にわたる作品で助監督を務めました。

誓いを果たし、監督に

助監督の仕事内容は監督とは全く異なるそうで、監督と衣裳や美術担当者などの仲介をしたり、スケジュール調整などを行います。また、映画の細かな演出面の下調べをし、監督に提案もします。

「監督になるための試験などではなく、助監督として経験を積んでも監督になれるわけではありません。助監督になってから監督になるまでが大変でした」と加藤さんは打ち明けます。

「40歳になるまでに監督になれなかったら、監督を目指すのは辞

めよう」。そう誓った矢先、映像クリエイターと作品企画を発掘し、販促・製作の全面的バックアップをする「TSUTAYA CREATORS PROGRAM」が行われることを知り、応募します。応募した作品『裏アカ』は準グランプリを受賞し、映画監督としてデビュー。自身への誓いを見事果たしました。

作品制作への想い

「映画を作るには、多くの人が携わる。みんなで一つの作品を作っていく、仕上がっていく過程が楽しいです」と微笑む加藤さん。

また、作品を制作するうえで「何を伝えるか」を大切にしているとのこと。『裏アカ』では、30代が感じていることを表現したいとの想いから作ったそうです。

「理想とは違う現実にもがき、渴きを感じていた30代の当時の自分の境遇を作品に結び付け、SNSが日常的に使われている時代背景などを考えてつくりました」と説明します。

これからの活動

今後は、地元愛知県を舞台とした映画をつくりたいと加藤さんは話します。「愛知の方言やよさを盛り込んだ映画をつくってみたい」とにっこり。また、「一番好きな映画が『バックトゥザフューチャー』で、『冒険や夢、ラブストーリー』といった要素が詰まっている。自分もエンターテイメントの極致となるものをつくってみたい」と意気込みます。

加藤監督の今後の活躍が楽しみです。

